

Shiripaの星

[シリパのほし]

北星学園余市高等学校同窓会誌



近況報告「湯」

川端修二郎 (32期)



32期卒業生の川端です。卒業してから十数年、紆余曲折ありましたが2011年3月に仙台から余市に移住、父の実家が営んでいる銭湯(寿湯)を継ぎました。私が継いだ時には「潰れかけている」というよりは「潰れてる」と認識されているだろうな...という銭湯に、まずは暖簾を注文し、「この銭湯潰れてません!」という所から始まりました。油の値段が高騰し道内の銭湯が次々に閉店していく中、町民の方々に様々な縁を繋いでもらい、建築廃材やぶどう畑の杭、ニッカウイスキー



さんの使わなくなった樽などを燃料に、油を使わず風呂を沸かしてなんとか今も潰れずに今年で92周年(私が継いでからは12年)を



迎えることができました。在学中は古くて汚い銭湯を恥ずかしく思い、友達を誘うどころか自分ひとりでも近づくことのないなかつた銭湯ですが今は私の誇りとしてなんと100周年を迎えたい!との思いで頑張っております。ありがたいことに学祭準備期間や寮のお風呂が壊れた?と思われるタイミングで在校生の方にもご利用頂いております。8年前には町内の同世代の仲間とフットサルチームKotobuki・FCを結成。北星の旧体育館を借りて開催されたリーグ戦に参加した時はなんとも感慨深いものがありました。5年前ですかね。高速道路が余市まで伸びてきました。ICは北星余市のすぐ近くです。銭湯だけでは厳しいので冬は高速道路の除雪のバイトをしています。原稿不切がギリなので今夜は雪が少なそうなので詰所の仮眠室でペンを握りながら当時を思い出しております。余市に住んでいながらほとんど

母校とは関わりのない生活を送っていましたが、家内の働く幼稚園の園長先生が北星余市の出身という事から同窓会役員のお話を頂き、去年から参加させて頂き今回の記事を書かせて頂くことになりました。余市に足を運ぶ機会があれば是非寿湯にお立ち寄りください。良い温泉紹介します!

小林 敏晏 (50期)



50期卒業の小林敏晏です。

私は本当にフラフラとした人間でした。私は卒業して、そのまま余市をスタートして沖縄までヒッチハイクをしました。ヒッチハイクをして正直、私は何も感じませんでした。

その時に強いて感じた事は東北などの北の地方はご年配の方がよく車に乗せてくれて、反対に九州などの南の地方に進むと若い方が車によく乗せてくれた事にその土地柄の違いを感じました。

その後、ワーキングホリデーでカナダに行きたいと思い、ダブルワークでバイトをして毎日朝の8時から夜の2時まで働いて約1年半で200万円を貯金してカナダに渡航しました。

カナダでは語学学校や代理店などは使わず、家だけをJ.P.カナダで借りて向かいました。

なので初めの方は知り合いを作り、有力な情報を得る為に初日から1人でダウンタウンのクラブや日本人パーティー、わざと語学学校の説明会などに参加をして積極的に人と交流を交わしました。

その結果、カナダに着いて1週間で仕事を見つける事ができ、今でも交流のある友人6人とタワーマンションの1室を借りて友人だけでルームシェアを楽しむ事ができました。

そんな楽しい日常もコロナのせいで帰国をせざるをえない状況になり、VISAがまだ2ヶ月ほど残った状態で日本に帰国しました。

あまり良いキッカケではありませんが、このコロナの影響によりフラフラとした自分が変わり始めました。

まず日本に帰って仕事がない事に危機感を覚え、触った事もないパソコンを一から学び、帰国までの間は独学でプログラミングを勉強しました。

帰国後2週間でプログラミングのスクールに入学してそこで週7日で13時間プログラミングを学び、Webデザインというデザインを手掛ける道を見つけました。

順調にプログラミングスクールを卒業して、メーカーに就職。

主に業務内容は自社のデザイン、制作物の作成や印刷、企画、撮影、編集、広告、ECサイトの運営などの

Web関連の業務全てを手掛けさせていたでいています。

今ではWeb関係の部署でマネージャーとして若手2名の育成も行っており、人の成長していく楽しさに日々気付かされております。

その他にも、会社で学んだノウハウを活かし個人事業主として個人で仕事の依頼を受けて仕事もしております。ですが、結局カナダに行く前とは変わらない労働時間で今も働いています。

ただ昔と違うのは今は娘が生まれて、娘の為に頑張れるというところです。

これはあくまで個人の意見ですが、結局人は自分の為よりも誰かの為に頑張る時の方が力は発揮されると私は考えております。

そんな存在を1人でも多く築く人生が私の明るい未来の1つなのかもしれません。

2年間の休職を、 いよいよ子どもたちに 還元すんで！

教員 本間 涼子

沖縄で大学生をしてみました。きっかけは北星余市でのあれやこれやです。

その中で1番根底にあるのは、蓄積された北星余市の子どものたちとの関わりの中で得た「大事なもののこと」は何か」というものの見方・考え方です。次に、

3・11の原子力発電所事故で自覚した「大人の責任」が、そして最後に、修学旅行があります。

コロナ禍を除いて数十年の間、北星余市の修学旅行先は沖縄です。もちろん、その学年集団をどう作り上げていくか、という視点がメインのテーマになっていきます。だけどなぜ沖縄なのか。そりゃあ暖かい気候や青い海もあるでしょう、愚かな戦争の痕跡から学ぶこともあるでしょう。

「愚かな戦争の傷跡から学ぶこと」って、一体何を指すのか。沖縄戦については、資料館やガマ、平和ガイドさんのおかげで、多少は、子どもたちもイメージをもって何かを感じる事ができるかもしれない。だけど、「今は戦後」をベースに平和学習を終えていいのか。行程には、嘉手納基地や普天間基地が見える場所が入っている。だけどそれについて何も説明ができない、それについて、子どもたちに考えるきっかけを用意できない。それでいいのか。

ということ、当たり前前に基地があり、さらに新しい基地もどんどん作られている沖縄で生活し、平和について学び、感じ、考えてきたのです。



「22年の時を経て」

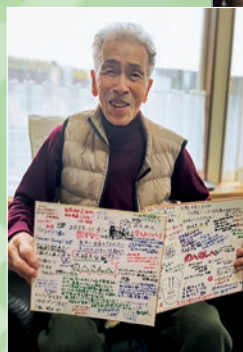
2023年11月4日、35期卒業生の同窓会を開催しました。今年は現役で入学した生徒が40歳になる節目であり、また35期1年D組の担任を最後に定年退職なさった一戸先生が80歳を超え、当時の教え子の顔を見て喜んでほしいという気持ちから開催する運びとなりました。

卒業から約22年、『北星余市』という経験をした人にかわかない独特の世界感に再度触れたい気持ち、コロナがひと段落したこのタイミングでやるしかないという思いから、計画が始まりました。

約半年間、各クラスの幹事が様々な方法で35期生への連絡を試みました。22年という歳月の中で連絡先が変わっている人も多くいましたが、皆様の協力により半数以上の方々に連絡をとることができました。

同窓会当日は、担任団と60名近い卒業生やその家族が参加してくださり、本当に多くの感謝と喜びの声をいただきました。

参加者の中には、ここ数年の間で1番楽しい時間だったと仰ってくださる方や、もしまた数年後に開催されるならそれを目標に明日からまた頑張れる、と仰ってくださる方



もいて、北星余市が皆んなにとって特別な場所だった事を改めて感じました。

北星始まって以来初、ここまで多くの卒業生が集まったといわれた35期同窓会。皆、様々な形で再会を果たし、この会がなければ再会できなかった出会いがあったようです。

時代やタイミングによって色々な形のそれぞれの北星余市があると思います。今、楽しいこと、辛いこと、色々なことを含めて、数年後また皆様の北星余市の思い出として輝くことを願っています。

35期同窓会幹事一同

同窓会

元教員 静野 潤一

時の流れは驚くほど早いもので、35期の生徒たちは不惑の齢を迎えていました。

そして、彼らと一緒に北星余市を卒業した私も気がつけば、教員生活より歯科医師生活の方が長くなっていました。

そんな彼らが同窓会を催してくれ、嬉しい事に私にも案内を送ってくれました。

実際に同窓会に参加する前は、緊張感と途中で北星余市を去ってしまった、幾ばくかの後めたさの様な気持ちもありました。しかし会場に入るとそんなものは途端に消え去り、久方ぶりに「シズ〜」と呼ばれると、あっという間にあの頃にタイムスリップ。ジャスマックプラザはたちまち北星余市プラザになっていました。

あちらこちらで、やっさん、キャンディ、まなぶ、ヤッシー等の声が聞こえてくる度に懐かしく、嬉しい気持ちになっていました。

辛いこともたくさんあったけど、楽しかったあの頃。それを思い出し、明日へのエネルギーをたくさんチャージしてもらいました。

ありがとう、35期生の皆んな！

ありがとう、北星余市！



同窓会に参加して

元教員 谷口 学

昨年の春、北星余市を退職し、実家（江別）に戻った自分の所に余市の住所から転送された封書が届きました。それは丁寧に作られた同窓会の案内状でした。会場も居酒屋では無く、過去に自分が何度もコンサート会場として行ったことのある場所が記されていました。

学校を辞めて母を施設から引き取り一緒に暮らすのが当初の予定でしたが、母の足は衰弱の為、家で生活することは出来ませんでした。仕事に就くことも無く、家で一人で、余市のアパートから引き上げてきた荷物の壁に囲まれて暮らしていた時、その案内が届いたのです。翌日には参加の旨の返信を投函しました。

外に出る機会が全く無くなったし、無収入ということもあって、当日は皆の元気な顔が見ればそれで良いと思い、二次会は辞退し帰ろうと思っていました。しかし当然のことですが、会ってしまえば嬉しくて、終電迄、楽しい時間を過ごし、八島先生と二次会の会場を後にしたのでした。



お世話になりました！

教員 妹尾 克利

北星余市をこの3月で退職し、4月からは同じ北星学園系列の大学に移籍することになりました。企業の営業マンとして社会人生活をスタートさせ、20代の頃は職を転々としていましたが、そんな私が29歳で母校に赴任し、気がつけば19年、毎日気心の知れた先生たちと一緒に働けてとても居心地が良かったのだと思います。今振り返ると、実に楽しく充実した日々でした。

一方、赴任する以前からライフワークとしてメディア教育の研究をしており、心のどこかにいつかは研究者になりたいという思いがありました。学校で実際にメディア教育の実践に関わった生徒たちの気づきや成長を目の当たりにする中で、その思いは一層強まりました。学校に勤務する傍ら大学院へ通い、日々の教育実践について学術的に考察し、理論と実践を行ったり来たりできたことはとても恵まれていたと思います。



仕事と二児の子育てをしながら、休職もせず大学院を修了できたのは、ひとえに家族の理解と支えがあったこととは言うまでもありません。しかし同時に、北星余市という職場環境でなければ、これは成し遂げられ

なかつたでしょう。

今まで数々の失敗を許してくれ、私を成長させてくれた母校の教職員、寮下宿の方々、そして生徒たちや保護者の皆様へ感謝の気持ちは筆舌に尽くせません。

たとえ職種が変わっても未来の子どもたちのためにどのような教育を残すか、という本質的な部分は何ら変わりません。新たなステージでは、これまで積み上げてきた知見を世の中に還元できるよう尽力し、北星余市の素晴らしさも伝えていきたいと思っています。そして、駆け出しの一研究者として、北星余市の名に恥じぬよう残りの人生を精一杯精進する所存です。今後とも北星余市を応援してください。よろしくお願ひします。

余市マルシェ

高校生マルシェ

教員 安河内 敏

北星余市高校では総合講座「ぶどうのお仕事」でワインを造っています。ワインを造るといっても「お酒」ですので、学校だけでは世に出すことは困難です。クリアしなくてはならないことがいっぱいあるからです。その1つ1つを外部の方達の協力の元なんとか販売までたどり着きました。今回は縁あって株式会社無印良品とのコラボ企画で、2023年8月6日に「余市マルシェ」11月5日に「高校生マルシェ」で札幌パルコ店でワインを出品しました。高校生マルシェでは余市マルシェでの経験を生かして、1本5000円としました。これは前回10000円は手が出さない、5000円なら買うのに...というお客

さんの声を反映しました。そしてなんと16本売れたのです。お客さんに講座の話を聞いてもらいながら、対面で販売することはとても勉強になりました。今後はネットでも販売し、生徒の活動のために稼ぎたいと考えています。



同窓会の奨学金制度の利用状況等について

活動報告

母校の教育活動を支援するという同窓会の目的実現のため、同窓会では奨学金制度（給付型）をもうけています。

会員のお子様が北星余市へ入学した際、希望者には在学中の授業料等を補助しています。（月/5,000円、2人目が同時に在学中は5,000円×人数）

2023年度は、1年生と3年生の計2名に利用していただきました。

なお、本奨学金は、同窓会で運営する自動販売機（校舎1階ホールに設置）の収益金の一部より運営されています。

Shiripaの星

Vol.21
2024年3月発行

[発行] 北星学園余市高等学校同窓会「シリパの星」編集委員会
〒046-0003 余市郡余市町黒川町 19 丁目 2 番地 1
TEL(0135)23-2165 FAX(0135)22-6097
URL <http://www.hokusei-y-h.ed.jp/>

顧問	塚原 治	妹尾 克利
編集長	松村 悦子(15期)	
副編集長	松浦 一法(12期)	
編集委員	安藤 栄子(1期)	平野満寿美(14期)
	本間美智子(5期)	高崎 麻美(40期)
	馬場 篤(9期)	西岡 知洋(37期)
	馬場 希(12期)	川端修二郎(32期)